



アジア福音同盟総会（2020年11月17-18日、オンラインにて開催）

コロナ禍の先を見据えて

今年6月に文書総会として開催された、第35回日本福音同盟総会において、理事長に選出され、4か月が過ぎようとしています。今回の改選では新しく7名の方が加わり、新体制でのスタートとなりましたが、新型コロナウイルス感染拡大により、理事が一堂に会する事ができず、オンラインによる会議（JEA 理事会）が続いている状況です。

このような事態の中で、JEAは神学委員会による『心を合わせて福音の信仰のために～新型コロナウイルス時代を生きる教会～』の文書を配布させていただきました。今も日本中の教会が試行錯誤しながら、礼拝を守り、宣教の働きを継続されていると思います。コロナ禍は、教会が大切にしている礼拝において、共に集い、神をほめたたえ、祈り、交わることを分断する結果をもたらしました。さまざまな制限の中で、私たちは、もう一度、私たちの礼拝に対する姿勢を問い直されていると思います。感染に関する不安や、財政の逼迫から来るストレスもあるでしょう。私たちは、互いの重荷を共有し、支え合い、このコロナ禍の先を見据えて歩んでいきたいと願っております。

また、JEAは福音派のみならず日本におけるキリスト教界の協力と宣教の働きが押し進められていくことを願い、これまで培われてきた関係をさらに深めつつ、新しい関係の構築を願っております。コロナ禍の中、大きな広がりを持つ会議や集会がオンラインを用いて開催されています。そこには新しい出会いがあり、新しい可能性が生まれ、新しい働きが始まってい

ます。新たな教会のあり方、宣教の可能性をさらに探っていきましょう。

コロナ禍の中で、大切なこと、試されていることは、キリスト者の愛であると思います。私たちには、神の民を愛するという、全人格的な福音が委ねられているのです。収束への道はまだまだ見えてきませんが



石田敏則
JEA 理事長
シオン・キリスト教団

「試練と共に脱出の道を備えてくださる」（I コリント 10：13）主に信頼して出来る協力を継続いたしましょう。この苦難を乗り切る時、神は素晴らしい恵みを更に知る者としてくださいます。日本と世界の教会のために、共に集まり主を礼拝する日が一日も早く訪れるよう、続けて祈ってまいります。

今期は第7回日本伝道会議2023年に向けて実行委員会が発足し、準備がスタートしました。JEAも各委員会をはじめ担当部署を挙げて協力体制を整えてまいります。新しい時代に即した伝道会議、そして次の世代へバトンを繋げる日本伝道会議となることを期待しています。今後とも、皆様のご支援とご協力を宜しくお願いいたします。

目次

巻頭言・JEA 理事長	1
新理事の紹介	2
コロナ禍の災害支援 青年委員会の取り組み	3
宣教フォーラム 2020	4
次世代育成 / EMNJ	5
牧師の書棚	6
流れのほとり コロナ禍と信教の自由	7
JEA アップデート 総務局より	8

JEA 新理事 (2020-2022 年度) の紹介

2020年6月30日にJEA文書総会が開催されました。理事選挙が郵便投票によって行われ、理事12名が選出されました。理事長に石田敏則師(シオン・キリスト教団)が選出されました。石田先生の紹介は巻頭言にて代わりとさせていただきます。以下、11名の新理事の先生方を紹介します。



副理事長・朝岡 勝
日本同盟基督教団

「日本同盟基督教団の朝岡勝です。副理事長としてご奉仕させていただきます。今の時と場を意識しながら、諸教会の協力と交わりとともに、世に対する教会の責務を果たすJEAであることを期待します。よろしくお願いいたします。」



副理事長・内山 勝
JCE 7 担当・
イムヌエル綜合伝道団

「イムヌエル綜合伝道団の内山勝です。今期は副理事長を拝命し、また名古屋で牧会していることもあって、JCE 7の担当となっています。困難な時代に、福音派諸教会を繋ぐインフラの役割を果たせるよう願っています。」



会計(正)・星出 卓也
社会委員会担当・日本長老教会

「日本長老教会の星出卓也です。前年度から引き続き、社会委員会と会計を担当致します。激動の時代の中で問いかげられる課題に対して、主の教会が神の言葉の真理に堅く立ち、信仰を告白できるよう取り組みたいと思います。」



会計(副)・船橋 誠
日本メノナイトブレザレン教団

「日本メノナイトブレザレン教団の船橋誠です。理事二期目で副会計を担当致します。JEAが福音派諸教派や団体の宣教協力のための結び目として機能していくことを願っております。よろしくお願いいたします。」



書記(正)・山崎 忍
ウェスレアン・ホーリネス教団

「ウェスレアン・ホーリネス教団の山崎忍です。JEA理事二期目を務めさせていただきます。理事会書記、総務アドバイザー、宣教インフラ部門の担当です。苦悩する日本、アジア、世界において福音宣教のためにお仕えしたいと願っております。」



書記(副)・井上 義実
日本イエス・キリスト教団

「日本イエス・キリスト教団荻窪栄光教会牧師の井上義実です。理事会副書記を務めます。宣教の厳しい時代、コロナ禍の世情にあつてこそ、交わりの中で福音の確かさを、共にある喜びを味わわせていただきたいと思います。」



援助協力委員会担当・神戸 博央
活けるキリスト一麦の群

「援助協力委員会担当となりました神戸博央です。活けるキリスト一麦西宮教会(兵庫県西宮市)で主任牧師として奉仕しています。JEAが地域・教団・教派を越えた交わりの起点となれるように尽力できればと思います。」



青年委員会担当・倉嶋 新
日本バプテスト教会連合

「日本バプテスト教会連合の倉嶋新です。青年委員会を担当いたします。この働きが次世代のみならずあらゆる世代の方々とともに、主の教会を建て上げる働きの一助となることを願っています。よろしくお願いいたします。」



女性委員会担当・島津 吉成
日本ホーリネス教団

「日本ホーリネス教団辻堂教会で牧会をしています島津吉成です。女性委員会を担当します。厳しい状況の中ですが、JEAの交わりを通して教会が強められ、その使命を果たしていくことができるようにと願っています。」



宣教委員会担当・三浦 春壽
日本福音キリスト教会連合

「キリスト教朝顔教会の牧師の三浦春壽(はるとし)と言います。宣教部門担当の理事です。この時代に現されている神様の御心をみことばから教えられ、主の霊によって宣教が進められるように祈ります。」



神学委員会担当・水口 功
東京フリー・メソジスト教団

「東京フリー・メソジスト教団の水口功です。神学委員会の担当理事となりました。那須で行われた日本伝道会議以来、JEAからは数々の刺激をいただいております。今回、JEAと送り出される教団とのパイプ役になればと願っております。」

コロナ禍における災害支援

村上正道 援助協力委員長
JECA 湘南のぞみキリスト教会

援助協力委員会では、今回のコロナウイルス感染拡大を、全世界規模の災害と考えています。その中で、今年7月に、熊本県南部を中心に九州地方・中部地方で発生した豪雨災害は、二次災害と言うこともできるでしょう。被災地支援のあり方を大きく変えるものでした。

これまでの被災地支援は、まず災害が発生したならば、支援団体(ハンガーゼロ、救世軍、クラッシュジャパン、オペレーションブレッシング、ワールドビジョンなど)が、すぐに被災地へ駆けつけ、被災状況の確認をして、支援に取りかかるものでした。地域の牧師会などが中心となってボランティアセンターが立ち上がり、そこが活動拠点となって、全国からボランティアの方々が集まることにより、支援活動が継続的になされていきました。

ところが、今年のコロナ禍においては、これまでのように、すぐに支援団体が駆けつけて、被災地支援を開始することができなくなってしまいました。その中で、コロナ禍における被災地支援のいくつかの問題が出て来ています。一つ目は、人手がなかなか集まらず、働きが限定的になるということです。たとえば、救世軍は、避難所などで炊き出しをして喜ばれていましたが、他の地域から人が入っていけないとなりますと、そうした活動が制限されてしまいます。クリスチャン保健師や看護師

を中心とした健康相談の場をもつことも難しくなるでしょう。もう一つの問題は、ボランティアリーダーの不足です。ボランティアセンターを運営するために、現場のニーズを把握し、ボランティアを割り振り、現場で動かせる人が必要です。コロナ禍で他から援助を期待できないとなると、たとえボランティアが集まったとしても、ボランティアセンターが立ちゆかないという事態になってしまいます。

それらを踏まえた上で、コロナ禍の状況の中での被災地支援のあり方についていくつかの提言をさせていただきます。一つは、他からの支援を受けることが難しい状況であることを踏まえて、自分たちの地域で、防災ネットワークの構築を進めていくということです。もう一つは、被災地では様々なニーズがあり、多くの人が助けを必要としています。そこでのニーズを把握しつつ、自分たちができる範囲で働きをするということです。

コロナ禍の中で、私たちのできることはますます限られ、無力さを覚えることがあるかもしれませんが、私たちのできる最善を、主にあつてなす時に、主がそれを用いてご自身の栄光を現してくださいと信じます。

JEA 青年委員会

蔦田聰毅 青年委員長
イムマヌエル綜合伝道団・堺キリスト教会

青年委員会の取り組み

青年委員会の働きのため、お祈りとご協力を頂き感謝申し上げます。今年も1月20日のNSDサミットから活動が開始されましたが、その時には未だコロナ禍の影響など全く計算外で、7月3日の第2回NSDナイトの計画などを立てて、1月27日に行われたプログラムミーティングにも、そのような報告を上げていました。

しかし3月に入ってから影響が出始めて、3月16日の委員会がキャンセルされ、以降は6月1日、7月6日(キャンセル)、8月21日、9月24日、10月8日と、すべての委員会をオンラインで開催してきました。

7月3日の第2回NSDナイトは、残念ながら中止となりましたが、この分野の働きはなお必要との認識から、来年以降も継続したいと考えています。

9月29、30日に開催されたJEA宣教フォーラムには、青年委員会としても全面的に協力、参加して、2日目には、『SNSを駆使する世代とポストコロナの青年宣教』と題して分科会を担当しました。これまでのコロナ対応の働きの中で、実際に青年たちが顔を合わせて会うことができない状態が続いていますが、今どのような取り組みが可能なのか、どのように取り組んできたのか、教会の立場からフリーメソジスト桜井聖愛教会の

大澤恵太郎、教団的な取り組みを兄弟団大阪教会の寺東真也師、そして宣教団体を代表してKKGの吉澤慎也主事から頂きました。取り組みの経緯や内容、そのメリットや結実、限界や課題などが、具体的な事例を挙げて語られ、たいへん参考になりました。後半はブレイクアウトルームでいくつかのグループに分かれ、自由な語らいや分かち合いの時がもたれました。時間の関係もあってSNSまでは入れませんでしたが、それは来年1月25日に開催する青年宣教サミットで、SNS世代の真ん中で働いているhi-b.a.の取り組みを紹介されることが予定されていますので、ぜひ楽しみにご参加ください。

その青年宣教サミットですが、NSD II(2018年11月)の前から、教会・教派の青年担当者たちの会合と、超教派宣教団体のリーダーの会合が協力する意味で「サミット」と名付けて続けられてきました。次回は2021年1月25日午後1時半から、今回も青年宣教に携わっている働き人、奉仕者を対象に、開催される予定です。今から予定の中に入れてご参加ください。また同労者にご紹介くださり、対象の方々をお送りくださいますようお願いいたします。

宣教フォーラム 2020 報告

小平牧生 宣教フォーラム部門
基督兄弟団・西宮教会

宣教委員会主催の JEA 宣教フォーラムが、9/29(火)、30(水)の二日間の日程で開催されました。JCE 開催年を除いて毎年開催地を変えて行っている宣教フォーラムですが、当初の計画では、加盟団体や協力団体の方々に参加していただいて 2023 年に予定されている JCE7 のテーマや理念についての討議を東京で行うことを計画していました。しかしこのコロナ禍のために、ともに集まって開催することはできなくなりました。そこで、オンラインでの開催とし、テーマを「コロナ禍で、宣教について考える」として、教会、宣教、礼拝など、私たちの本質を考えさせるこのコロナ禍の経験を踏まえて、JCE7 につなげていくことをめざすこととしました。結果的には Zoom やウェビナーを用いることによって登録者が増え、全国各地から 277 名の方々が参加してくださいました。これまでは JEA 関係者と開催地の牧師また信徒の方々が参加者のほとんどでしたが、今回は広く各地域から参加していただくことができました。皆様のご協力に心から感謝をいたします。

プログラムとしては、9/29(火)の午前に、分科会 1 として次の 4 つの分科会を Zoom で行いました。JEA の専門委員会の準備した分科会としては、①『「次世代を育てる宣教インフラ整備(次世代育成)」調査報告』(宣教研究部門)、②「世界の日本語宣教と日本の教会の繋がり」(異文化宣教ネットワーク)、③「我、教会を信ず・オンライン礼拝とは」(神学委員会)、そして今回の特別の分科会として、元公衆衛生医である吉田浩二師(JECA 厚別福音キリスト教会牧師)に④「新型コロナウイルスと教会の社会的責任」とのテーマでの分科会を行っていただきました。

29 日の午後は、分科会 2 として 4 つの分科会を行いました。宣教委員会による分科会として①各団体の宣教担当者会議として「コロナウイルス感染拡大下での各教団・宣教団体の対応」(宣教研究部門)、②「日本における外国語宣教と日本の教会の繋がり」(異文化宣教ネットワーク)、③「旧約聖書における律法の柔軟な運用・いっしょに集まる幸い」(神学委員会)、そして④分科会として JEA 理事長の石田敏則師による「日本伝道会議の歴史」を行いました。

翌日 30 日の午前は、ウェビナーを利用して次の二つの主題講演を行いました。主題講演①は宣教委員長の中西雅裕師が「コロナウイルス禍での教会～宣教の課題と可能性～」とのテーマで講演し、その後、三浦春壽師、吉川直美師、岩上敬人師を交えてのディスカッションが行われました。続く講演②では JCE7 実行委員長の小平が「JCE7 に期待されるもの」との題で講演をし、同じように羽鳥頼和師、畑中洋人師、大嶋重徳師がレスポンスをし、ディスカッションを行いました。

限られた時間でしたが、いずれのテーマも関心の高いテーマであり多くの方々が参加してくださいました。

同日 30 日の午後は、JCE6 の各プロジェクトによる分科会が行われました。いずれも JCE6 から JCE7 に向かって掲げたテーマと目標に対して、コロナウイルスの中にあって取り組んでいる内容をあつかった内容でした。各プロジェクトと分科会のテーマは以下のとおりです。①聖書信仰の成熟を求めて：「聖書信仰の成熟を求めて」、②日本社会と宣教：「コロナ禍で問われ、覚えておきたい教会のテーマいくつか...いのち、空気、社会的責任、身体性、十字架、悔い改め...」、③教会と「国家」：「コロナ禍と信教の自由」、④持続可能な社会の構築：「持続可能な開発目標(SDGs)と宣教協力」、災害対応を通して仕える教会：「コロナ禍における被災地支援」、⑥ファミリーミニストリー：「コロナ禍で見えてくる家族の本質」、⑦ディアスポラ宣教協力：「コロナ禍と故郷を離れて暮らす人々への愛」、⑧ビジネス宣教協力の次世代構想：「複合災害からの新常态に向けたビジネス宣教協力」、⑨教会開拓、教会増殖：「コロナウイルス対策セミナー(アジアアクセスジャパン主催)のデータからの考察」、⑩痛みを担い合う教会：「東日本大震災からコロナ時代へ～骨太の福音に生きる教会を目指して～」、⑪青年宣教：「SNS を駆使する世代とポストコロナの青年宣教」、⑫子ども：「子どもプロジェクトの現在の活動報告と JCE7 に向けての活動について」。

フォーラム終了後には、インターネットを利用したアンケートを提出していただきました。111 通の回答が提出されましたが、こちらも紙面でのアンケートとはことなり自由な字数で記すことができるために、各分科会、主題講演、また JCE7 への期待など、今後のために非常に参考になる多くの意見をいただくことができました。宣教フォーラムの全体的な感想としては、「コロナ禍での貴重な示唆や励ましを受けられて感謝だった」、「おそらく通常では出会えなかった方々と出会えた」、「遠隔地であるにもかかわらず参加できたのがよかった」、「分科会を zoom で、主題講演をウェビナー形式でという使い分けがうまく機能していたように思う」というように、今回のテーマ、またオンラインでの開催についても肯定的な意見をいただいたように思います。

今回のこのフォーラムの経験は、間違いなく今後のフォーラムやまた JCE7 の会議のもち方にも大きく生かされていくものになったと思います。来年 2021 年は、東日本大震災から 10 年を迎えます。宣教委員会としてはこの 10 年をふりかえり、また JCE7 につながるフォーラムを計画しています。お祈りに覚えていただければ幸いです。

次世代育成調査報告書

福井誠 宣教研究部門
日本バプテスト教会連合・玉川キリスト教会

このたびは、皆様に、次世代育成に関する宣教調査のご協力をいただきありがとうございました。今回宣教委員会研究部門でまとめた「次世代を育てる宣教インフラの整備（次世代育成）調査報告書」は、デジタルデータで、有料で配布させていただいておりますので、ぜひご覧いただければと思います。

次世代育成に関しては、教会の次世代にフォーカスを当てた場合、既に多くの方々が感じておられるように、①人材、②対象、③方法の課題があり、それぞれ一朝一夕には解決しにくい内容があります。大切なのは、次世代そのものの育成を意識しながらも、次世代を含めた人のライフサイクル全体を考慮した、体系的な信徒の育成計画をもつことです。また、次世代への取り組みに関する現状のみならず、その「準備状況」をよく評価して地道、且つ丁寧に取り組んでいくことです。さらに言えば、教育者の個人的な能力の向上もさることながら、養育的な雰囲気や教会の中に作り上げていくことです。次世代に「戦いを教え、知らせる」（士師記 3:2）ためには、パーソナルな信頼関係がやはり大事にされなくてはなりません。

しかしながら、次世代が喫緊の課題であることの中には、献身者の穴埋めができない教会の切羽詰まった現実がありま

す。既に次の新しい調査のために、教団・教派へのインタビューなどによる事前調査を進めていますが、もう 20 年も開拓がなされていない団体、もはや日本人の開拓伝道者が起こされない団体、教会が教会を生み出すサイクルが過去のものとした現実が、浮き彫りになってきています。

2023 年の伝道会議を目標とする短期的な研究では、「教会の開拓、形成、増殖（仮称）」というテーマで、小規模教会、中規模教会、大規模教会の現状を明らかにし、また昨今のコロナ禍の影響を踏まえながら、今後の教会の方向性について、それぞれ規模別に、どのようなことを丁寧に心掛けていくべきかを提示できればと考えています。また、西欧では、教会の質を評価する NCD（Natural Church Development）分析なるものがあって、教会の将来像を予測し、どのように取り組むべきかを知るためのツールが開発されています。日本においても、日本の文脈に基づいた独自の客観的なツールが開発される必要があることでしょう。これも長期的な取り組みとして検討中です。ぜひ、お手数をおかけいたしますが、新しい調査研究に引き続きご協力いただければ幸いです

外国人クリスチャンは日本宣教の同労者

永井敏夫 異文化宣教ネットワーク部門
単立 Jクレイハウス

異文化宣教ネットワーク部門は、今回の宣教フォーラム 2020 で二つの分科会を任された。今号では「日本における外国語宣教と日本の教会の繋がり」をテーマにもたれた二つ目の分科会を報告したい。今回は、日本で為されている外国語宣教の中で、特にアジア（ベトナム、ネパール）から来日している方々への宣教についての発題に耳を傾けた。以下、発題の中から抜粋を紹介したい。

ベトナム語話者は約 41 万人が日本に滞在しており、その半数は実習生である。8000 人ほどのプロテスタント信徒がいると推測されている。都内では昨夏より華人教会を借りてベトナム語礼拝がスタートし 30 人程が集っている。（毎月第二主日 17:30）この他に祈祷会、聖書研究会、リーダーたちの祈りと学びの機会がある。最近、大阪、名古屋の群れとも繋がり、互いに励ましあっている。

一方、ネパール語話者は約 8 万人が日本に滞在しており、クリスチャンは 4000 人から 5000 人と見積もることができる。ネパール語の礼拝から教会がスタートしたり、また個人宅に集まったの礼拝、英語礼拝への参加、日本語礼拝への参加など様々な事例がある。礼拝の場所や会場の提供、いろいろな形での交わりや祈りの機会をもって欲しいなどの希望があり、また共に主のために働く機会を求めている旨が語られた。

今回の発題は、前述の国から来ている方々とその群れの助け

手、励まし手として共に歩んでいる日本人によってなされた。こうした橋渡しをする人が日本での外国語宣教への扉を開く鍵の役割をしているように思われる。続いてグループセッションがもたれた。そこで出された外国語教会（集会）にどのように協力するかヒントを以下に記してみたい。

- ・祈る：「教会に来た外国人を通して厳しい現実を知り、祈るように導かれた」、「市内の牧師会で外国人の方々を覚えて祈りあっている」
- ・知る：「労働問題、人権問題、難民申請、国際結婚、子供の教育などの現状を知りたい」
- ・共に歩む：「日本の教会と外国語の教会がタイアップして伝道していけると良い」「外国人クリスチャンと次世代の交流をもつ（合同キャンプなど）」
- ・繋がる：「地方の教会までオンラインで情報共有がされ、様々な国の方との宣教協力が広がるように」、「外国語礼拝と日本の教会を繋げる場（オンライン）があれば、地方にいる外国語教会のリーダーたちも参加できる」

皆さんの教会でも、外国語教会と繋がる可能性について考え、祈る機会をもってみたらどうだろうか。分科会参加者のコメントにあった「外国人の来会は教会の祝福である」、「外国人クリスチャンは共に日本宣教を担ってくださる同労者である」という見方は、神ご自身の視点なのではないだろうか。

牧師の本棚

『心をも一つにして福音の信仰のために』
新型コロナウイルス時代を生きる教会篠原基章 神学委員
東京基督教大学

(JEA 神学委員会、2020年)

2020年4月、JEA理事会から要請を受け、神学委員会でコロナ禍にある教会が直面しているさまざまな問題に関する文書を準備することになりました。「With コロナ時代」にある教会を意識しつつも、「ポストコロナ時代」を見据えつつ、教会の励ましとなることを共通の願いとして、各委員がそれぞれのテーマで神学エッセイを執筆しました。読みやすさを考慮して、A4用紙1枚という制限を設け、8篇の神学エッセイで構成されています。以下はその概要です。

感染拡大によって、多くの教会で教会に集まることを一時的に止め、オンラインでの礼拝配信あるいはオンライン同時礼拝に切り替えるなどの対応を迫られました。そのような中であっても、決して教会が教会であることをやめることはなく、その真只中で教会が教会であることを模索することが求められています（「我、教会を信ず」）。集まる形態が変わったとしても互いに励まし合いながら集まることをやめず、このような時期にあってこそ信仰と希望と愛の善行に生きる者たちとなっていくことが大切であることが述べられています（『「いっしょに」集まる幸い～愛と善行を励まし合うことにこそ～』）。また、旧約聖書における律法の規定において、時に例外や代替案などの柔軟な運用が許容されており、緊急時の教会における柔軟な対応を考えていく上での聖書的な根拠が示唆されています（「聖書（特に旧約聖書）における律法の柔軟な運用」）。

感染拡大予防のためにインターネットを用いての礼拝配信の取り組みがなされました。そのような中において、礼拝の本質的な要素を大切にしたいオンライン礼拝の在り方についての考察がなされています（「インターネットを用いての『礼拝する』とは」）。また、インターネットを用いての遠隔礼拝における聖餐を行うことの是非についての問いに対する考察がなされています。緊急事態の期間は聖餐を控える方が賢明であるとしながらも、長期化する状況における聖餐の在り方についての問いかけがなされています（「遠隔礼拝における聖餐」）。コロナ対応を契機として教会のデジタル化は今後も一層加速していくことでしょう。教会がIT技術をいかにして受容していくかが問われています（「AI技術の成熟と教会を考える～30年後を見据えて～」）。

さらに、教会の歴史を紐解き、これまでの教会がどのように疫病と向き合ったかについての考察がなされています。感染症と教会の歴史には光と影がありますが、3世紀のクリスチャンたちが自らの命を賭して見捨てられた病者を看護し、貧しい者

や異教徒の遺体を隔てなく埋葬した背景にはキリスト教の死生観と終末観があったことが指摘されています（「感染症とキリスト教会の歴史から」）。そして、結びの一篇はコロナ禍にあって、実際に講壇から語られた5回の説教の要約が記されています。信徒も牧師も不安と孤独を感じやすい中にあるからこそ、みことばによって励まされ、共に主を見上げていくことで前進していけることが語られています。

2020年9月29日から30日にかけ、JEA宣教委員会主催の「宣教フォーラム2020」が「コロナ禍で、宣教について考える」をテーマとしてオンライン開催され、この神学エッセイをもとにした分科会を執筆者が担当しました。予想以上の参加人数に、コロナ禍にあって葛藤と模索の中にある教会の姿を肌で感じる機会となりました。また、共通の課題に直面する同労者との交わりは深い励ましの時でもありました。

※「心をも一つにして、福音の信仰のために～新型コロナウイルス時代を生きる教会～」(JEA 神学委員会) は以下のリンクで読むことができます。

<https://jeanet.org/release/2020/06/1949>

「心をも一つにして、福音の信仰のために」
～新型コロナウイルス時代を生きる教会～

2020年5月 日本福音同盟 (JEA) 神学委員会

目次

1. 「我、教会を信ず」	篠原基章
2. 「いっしょに」集まる幸い ～愛と善行を励まし合うことにこそ～	赤坂 泉
3. 聖書（特に旧約聖書）における律法の柔軟な運用	千代崎健道
4. インターネットを用いて「礼拝する」とは	山田 泉
5. 遠隔礼拝における聖餐	青木義紀
6. 感染症とキリスト教会の歴史から	吉川直美
7. AI技術の成熟と教会を考える～30年後を見据えて	船橋一郎
8. コロナ禍におけるみことばの励まし	宮崎聖樹

流れのほとり No.27

島津吉成 女性委員会担当理事
日本ホーリネス教団辻堂教会

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことにおいて感謝しなさい。」(1テサロニケ 5:16-18)

コロナ禍の中で、私たちはどうあったらよいのでしょうか。どんな時でも、基本が大事だと感じています。

第一は、喜びです。「いつも喜ぶ」というのは難しいですが、パウロは「苦難さえも喜んでいきます」(ローマ 5:3) と言うのです。それは、苦難が忍耐を、忍耐が練られた品性をというように、苦難は苦しいだけで終わらず新たなものを生み出すからです。コロナ禍の中でも何かが生み出される、そのことを信じて行きましょう。

第二は、祈りです。思い煩わないで祈るとき、「神の平安」が与えられると約束されています(ピリピ 4:6-7)。「コロナ後の世界」(文春新書)という本の中で、リンダ・グラットン(「人

生100年時代」というフレーズの提唱者)は、ポスト・コロナ時代に重要な4つの要素の4番目に「平静さ」をあげていました。確かに、不安や恐れが渦巻く中で、平静さを保つことは大事なことです。そしてそれは、祈りによってこそ与えられるものです。

第三は、感謝です。主イエスは、5つのパンと2匹の魚を受け取ると、まず感謝の祈りをささげられました(ヨハネ 6:11)。ややもすると足りないものを数えがちですが、主イエスは、今、与えられているものを感謝されました。そのとき、それが豊かに用いられたのです。

コロナ禍の中でこそ、喜びと祈りと感謝に生きたいですね。女性委員会の働きを通して、その輪が広がって行ったらと思うとワクワクします。女性委員会の働きにご期待ください。

第3回「かたりば」(オンライン)に参加して 矢島依枝・JECA 高森キリスト教会

2020年10月15日(木)第3回かたりばがZOOMにて、オンライン開催されました。「主の洗足のよう」そして「主が一番下にいて下さるのですから」とゲストのマツ知子先生が溢れる熱意で、初のオンライン参加者25名(北海道から福岡まで)に女性たちへのチャレンジを語って下さいました。

2019年11月、インドネシアで開催された世界福音同盟の総会に参加されたマツ先生は、現地のボランティアスタッフの献身的な愛の奉仕や指導者達の徹底した謙虚な姿(誰がリーダーかわからない程)に感銘を受けられました。人種、性別、世代を超えて、お互いのために共に歩む強い絆で結ばれた居場所、使命感をもてる雰囲気を提供することを目指したいと思われ、参加者共々に励ましをいただきました。

新委員自己紹介 寺村真弓・インマヌエル板橋教会

4月から女性委員会に加わりました。現在、先輩方に教えていただきつつ奉仕に取り組んでいます。これまで教団内でも「女性」と名の付く部署に関わってきましたが、「女性」としてはどのようなことか、「女性としての働き」とはなにか、はっきりとした答えは出ないままです。様々に変化していく今の時代・状況の中、女性委員会に必要とされているものは何か、学びと交わりの中で考えつつ楽しく働きたいと思っています。

第14回心のオアシスリトリート(来年6月予定) 開催中止のお知らせ

新型コロナウイルス感染収束の見通しがつかない現在、全国から一つところに集まってのリトリートは開催困難と判断しました。次回はJCE 7後の2024年に予定しています。お一人お一人が主から豊かに養われますように。

(女性委員長・野寺恵美)

JEA 社会委員会

コロナ禍と信教の自由

児玉智継 社会委員
JECA・布佐キリスト教会

JEA 社会委員会では、新型コロナウイルスの感染拡大をめぐる社会の動きを、信教の自由という視点から問い続けています。委員会内では、それぞれのメンバーが、牧会や学びの場から、「コロナ禍と信教の自由」というテーマでペーパーを作成し、考察を試みてきました。そこで明らかになった問題は、公権力の介入という意味での信教の自由の問題ではなく、民主主義の脆弱性という問題でした。また、これまで信教の自由の問題は、公

権力との関わりに置いて考えられることが多いのですが、社会との関わりも無視できない要素であるということが分かりました。

社会委員会では、『その時に備えて 憲法問題 Q & A』において、「民主主義はキリスト教社会で形成されてきたものである」ということを確認し、また、「為政者と市民の双方が成熟していなければ、危うい制度でもある」ということを学んで来まし

(Page 8へ続く)

(Page 7 から続き)

た。今般のコロナ禍によって、その両者が決して成熟していたわけではなかったということが露呈してしまったように思います。そして、コロナ全体主義ともいべき風潮が生み出されました。すなわちそれは、「自粛警察」や「マスク警察」、そして「他県ナンバー狩り」に見られるような同調圧力です。医療従事者への偏見差別も激しさを増しました。そして多くの人々一リベラル・人権派とされる人たちまで！が、緊急事態宣言やロックダウン（都市封鎖）を待望し、その決断を渋る政府を無能呼ばわりしました。

こうした社会の動きの中に教会も置かれています。その時に、教会として何をどう考え、問い続けていく必要があ

るのでしょうか。

今年の信教の自由セミナーは、この問題について、皆さんと一緒に考えたいと思っています。今回は、新型コロナウイルスの感染状況を鑑み、収録したものを一定期間配信することになりました。詳しい内容は、後日ご案内いたします。ぜひ、そちらをご覧ください、ご視聴いただければと思います。

また、これまで行われてきた信教の自由セミナーの報告書もあります。JEA 事務局にお問い合わせください。個人的な学び、さらには各団体や教会などでの学びにご活用いただけましたら幸いです。

JEA アップデート

新国際渉外室長の紹介



JEA 国際渉外室では植木英次先生が退任され、20 年 4 月より新しい国際渉外室長としてインマヌエル王寺教会牧師の田辺寿雄先生が就任されました。植木先生は 2008 年から 12 年にわたって国際渉外室長としてご奉仕くださいました。またアジア福音同盟（AEA）議長や世界福音同盟（WEA）国際評議員などの重責を担い、アジア及び世界の福音派のために大きな貢献をしてくださりました。その尊い働きに JEA より心から感謝を表したいと思います。就任された田辺寿雄先生をご紹介します。田辺先生は 11 月に開催された AEA 総会において評議員の一人に選出されました。これからの JEA と AEA でのご奉仕のために、皆さまのお祈りによるサポートを宜しくお願いいたします。（総主事・岩上敬人）

「1966 年、熊本市で開拓間もないインマヌエル教会の牧師家庭に生まれました。聖宣神学院で訓練を受け、米国での留学後、2000 年から 2011 年までケニアの神学校で教えていました。帰国後、京都で 3 年、現在は奈良県のインマヌエル王寺教会で 6 年目の奉仕となります。この度、JEA 国際渉外室長の責任を与えられ、アジア福音同盟の働きにも関わり始めたところです。わからないことだらけですが、まずはアジア人の英語に慣れていきたいと思っています。宜しくお願いいたします。」（国際渉外室長・田辺寿雄）

第 35 回 JEA 総会の感謝

JEA 加盟団体の皆さまのお祈りとご協力により、6 月 30 日に第 35 回 JEA 総会（文書総会）を開催しました。加盟団体代議員の皆さまによる理事選挙・理事長選挙の郵便投票の開票、また重要議案の承認をいただきました。代議員の皆さま、ありがとうございました。今回の総会で廣瀬薫（前）理事長、大嶋博道先生、寺田文雄先生、船田献一先生、中西雅裕先生が理事を退任されました。これまで JEA のために真実に仕えてくださった先生方に心からの感謝を表すとともに、これからのご奉仕に主のますますの祝福をお祈りしたいと思います。

JEA 理事会の働きは、改選された新しい 12 名の理事の先生方（p. 2 で紹介）と総務局（小野寺従道総務局長、岩上敬人総主事）で進められていきます。皆さまのお祈りとご協力を宜しくお願いいたします。



文書総会にて。左から広瀬薫前理事長、石田敏則理事長、岩上敬人総主事、小野寺従道総務局長、井上義実理事

JEA 総務局から

- ◆全国の教会と同じように JEA でも ZOOM による専門委員会、理事会が行われています。また JEA 関連のイベントもすべてオンラインで行われています。顔と顔を合わせての交わり、コミュニケーションができない難しさと、オンラインのゆえに地方の方々に参加しやすい利点があります。コロナウイルス感染の収束を祈りつつ、今後の方向性を考えております。
- ◆総務局ではコロナ感染状況に合わせて勤務体制をとっております。現在、週に 2 日程度、事務所を開けています。
- ◆総務局では日々、JEA 加盟の全国の教会、団体の皆さまが守られますよう祈りの手を挙げています。



日本福音同盟

心をつなげて福音の信仰のために力を合わせて戦い（ピリピ 1:27）

JEA ニュース 56 号
(JEA)

発行・日本福音同盟
発行者：石田敏則 編集者：岩上敬人
〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 2-1 OCC 内
TEL : 03-3295-1765 FAX : 03-3295-1933
email : admin@jeanet.org